

# 「中国帰国者」児童生徒のエスニシティと学校教育の有り方 両国の狭間にいる子供達

王 彩香

(大阪大学大学院 言語文化研究科)

1. はじめに
2. 「中国帰国者」とは
3. 事例
4. 考察
  - 4.1 言語
  - 4.2 交流
  - 4.3 帰属意識
5. 多文化共生と「中国帰国者」児童生徒
6. おわりに

## 1. はじめに

海外から渡日した子供達が、現在、日本に大勢住んでいる。そして、日本とは異なった文化を背負いながら、日本の社会に適応していかなくてはならない現状がある。渡日の子供達の出身国は多種多様である。その中でも、「中国帰国者」の子供達は、自分の祖先に中国人であるという血統と、日本人であるという血統を両方持ち合わせ、その中で、自分は一体どちらに所属したらいいのだろうかという思いを抱きながら、家族の、そして、日本社会の期待に翻弄されながら生きている。

筆者は、本稿で、彼らの日本語教師をした経験から見てきた彼らの置かれている現状、そして、彼らの思いについて述べようと思う。渡日してきた彼らが、日本社会の中でどのような問題を投げかけているのかを具体的に提示することで、日本社会が、彼らをサポートするための体制をつくる手がかりとしたい。

## 2. 「中国帰国者」とは

まず、本題に入る前に、「中国帰国者」について概観する。

「中国帰国者」とは、一般には「残留孤児」、「残留婦人」と呼ばれている人々を指す。

しかし、彼らは自然発生的に「残留」したのではなく、国から棄民扱いをされ、否応無しに中国に残されたのである。そのため、彼らも「残留」と呼ばれることに抵抗を感じているので、本稿では彼らのことを可能な限り括弧つきで表現する。また、「残留孤児」、「残留婦人」の総称を「中国帰国者」とする。

近年に入り、多くの外国人が日本に流入している。そして、その中でも、中国からの渡日が最も多い。中国からの渡日は留学生、日本人との配偶者、不法就労者などが挙げられる。そして、中でも中国帰国者は、他の中国人外国人とは違った葛藤、悩みを抱えている。

「中国帰国者」の子供は、元来日本籍を有していた祖母と、中国籍を有している両親という家族単位で渡日することが多い<sup>注1)</sup>して、今回、筆者が調査の対象としてきた子供達も、すべてこのような家族構成であった(中には中国籍の祖父が含まれている家族もいる)。祖母達は、戦時中満州に渡った人たちであるが<sup>注2)</sup>戦後、日中の国交が断絶したことにより、日本に帰れなくなってしまった人達である。かつて敵国であった中国に日本国の保護無しに残留するという事は、大変危険なことである。ある者は、一緒に移り住んだ家族たちと別れ、ある者は子供を抱えながら、文化大革命を乗り越え、何とか生きてきたのである。当然、長い間願いが続き、待ちに待った帰国である。そして、祖母達の多くは、気持ちの上で、日本に帰属意識を持っている。しかし、一方で、子供達の両親は中国に帰属意識を持っている。そして、子供達は、そのような中で、まだ、確固たる帰属意識も持たないまま、親の都合により、渡日を余儀なくされ、中国籍から日本籍に国籍を変更される者、もともと日本人だったように育てられる者など、二つの国の狭間で翻弄されていくのである。

## 3. 事例

筆者は、大阪のある市が運営するボランティア教室で、日本語教師をしていた。また、同時期にその市の公立中学校で、「中国帰国者」生徒のクラスに入り込み、通訳をしていた。

そこで、ここでは、1999年の夏に行ったアンケート結果<sup>注3)</sup>に子供達に接して得られた

---

<sup>1</sup> 「入りこみ授業」といって、一般の学級に通訳が入り込んで、「中国帰国者」生徒に授業の内容を逐一通訳したり、理解を補ったりする。

事例を中心に見ていき、考察につなげたいと思う。

ここで、事例として登場する子供達のことを少し紹介しておきたい。

まず、公立中学で出会ったのは陳さん（仮名）である。彼女の場合、学校が日本語のケアをしているので、他の日本語教室には参加していない。学校では、日本語だけでなく、他の科目に対しても、学校で補えないところは、通訳や日本語教師など、できるだけ外部からの協力を得て、とり組みが行われていた。また、「違い教育」<sup>2</sup>や中国文化を知る時間など、周りからの理解を得るための取り組みも積極的に行われていた。

一方、ボランティア日本語教室で出会った「中国帰国者」の子供達の中に、張さん、張くん、呂さん、江さん、蔡さん、陸さん（すべて仮名）がいる。彼らは、学校ではほとんど日本語のケアをしてもらっていない。そのため、ボランティア日本語教室にやってくる日本語を勉強する。ここでのもう一つの目的は、居場所作りである。彼らは学校の中で、クラスに一人だけ、もしくは学校で数名だけというように存在する外国人なので、同じ境遇の仲間になかなか出会えない。学校では、中国語のわかる者がいないので、ここに来て、先生や仲間と話し、様々な問題を解決していく。

それでは、一人一人について見ていきたい。

#### 陳さんの事例

陳さんは、クラスで一人だけの「中国帰国者」生徒である。やってきた当時、彼女は一言の日本語も話せず、学校も一言の中国語も話せない状態だった。陳さんは渡日した当時15歳で、学齢でいうと中学3年であったが、いきなり受験、もしくは、卒業ということにも出来ず、1年学年を遅らせて転入した。それから1年かけて日本語は徐々に学習したものの、依然、周りの日本人生徒とはなじめていなかった。その理由に、話題が共通していないということがあった。周りの日本人生徒は、気を利かせて、彼女にいろいろと話しかけてくるのだが、共通した話題がほとんどないのである。日本人の子供達が、日本の歌手について話している時、陳さんは、その会話にまったくついていけない。しかし、日本人生徒も、それ以上、共通した話題を探してあげることができない。そうい

<sup>2</sup> 「違い教育」とは、学校で行われる同和教育の一種であり、「違うことこそすばらしい」という理念のもと、自分が他の人と違うことを列挙して、互いにその違いを正面から受け止めていこうという教育である。

った中で、学内で、かなり長い間、陳さんは話す友達がいない状態であった。そのせいもあって、筆者に対しては自分が中国人であるということを強く主張し、中国の友達の話をし、日本の文化にそれほど馴染むこともなく、家でも中国の歌手の音楽を聴いていた。

それでも、学校としては、陳さんに対する取り組みを積極的に行っており、ホームルームでの「違い教育」、留学生との交流、陳さんのお母さんによる餃子作り講習などを通じて、他の日本人生徒の間では、陳さんを中国人と認め、あるがままに受け入れていた。そうした状況であったので、筆者は、他の「中国帰国者」児童生徒に比べ環境の整っていた彼女は、比較的自由に振舞っていると思っていた。

ところが、ある時、陳さんは、中国で撮った友達との写真を持ってきてくれたのである。その中の彼女は、今まで見たこともないようなとびっきりの笑顔で映っていたのである。髪には赤い大きなリボンをつけ、うっすらとお化粧もして、おしゃれにして、写真屋でうつしたものだ。学内では、大人しくて、シャイな子で通っていた彼女だったが、もしかすると、本当はそうではないのかも知れないと、筆者には思えた。そして、彼女の作文を見た時、その思いは強くなった。作文は、中国を出てきた時のことが書かれていた。彼女の祖母が先に日本に行き、自分たちを呼び寄せたこと。陳さんは日本に行きたくなかったこと。しかし、子供の頃、中国にいたために苦労した彼女の祖母がやっと日本に帰れたのに、日本に行きたくないとは言えなかったこと、両親が行くという決断を出すまで、ずっと聞き出せないで悶々としていたこと、最後の日に、友達とパーティーをして、もう二度と会えないかも知れないと感じたこと、電車で見送りにきた友達を見て泣いてしまったこと。彼女の父親は、中国ではそこそこの地位についていたのに、日本に来て、スーパーで働くしかなかったこと、生活が大変で、彼女の母親も働くことになったこと……。大人になったら、会社を経営し、中国に大きな家を構え、いとこや友達と一緒に住みたいと話す。気持ちの上では、彼女は中国人であり、居場所は中国にあるのである。陳さんにとって、日本は長くいることになっても、仮の住みかにはすぎないのかも知れないと思った。

その他にも、特に問題があったのは、学校の授業である。日本語の問題だけでなく、学校の授業内容そのものが理解できないということである。一般に、中学校は小学校で学んだ基礎を積み上げる形で、更に知識を深めていく。しかし、日本と中国の教育カリキュラムは異なっているので、「中国帰国者」児童生徒には、日本の小学校で学んだ子供たちのような共通の理解がない。特に高学年になって渡日した者は、その程度が甚だし

い。また、漢字圏から来た子供達の場合、知っている語彙であっても、日本の音声からすぐには理解できないという問題がある。たとえば、理科の授業で、「じしん」という語を聞いて、何のことかわからなかったという。黒板に「地震」と書いて初めて、「じしん」＝「地震」ということを理解したという。陳さんは、漢字の語彙を覚える時に、中国語読みで理解しているからである。また、国語の文法で、「射る」という語の意味はわかっているにもかかわらず、どう読んでいいかわからないため、活用させることができなかった。これも、漢字を中国語で理解しているためである。漢字がわかるから、かえって中国語で意味を把握してしまい、日本語で把握する機会を失ってしまい、日本語として漢字を学ぶのはかえって難しいようであった。

学校側の取り組みとしては、参考書に中国語訳が付いているものを用意している。このように、中国語の教材を取り入れている学校はまだほとんどないので、この点では非常に恵まれた環境下にあるのだが、全教科、全課程においてこうした教材がそろっていないわけなので、まだまだ問題は残る。

#### 張さんの事例

張さんは、渡日した当時は中学2年であり、学齢に従って、中学2年に在籍した。しかし、渡日の時期が冬だったため、すぐに3年生に進学する。そして、日本で高校受験を経験し、通信制の高校に入る。彼女は、中国の中学にいた当時、いつもクラスではトップにいた。しかし、日本では、学力が足りなくて通信制の高校に入ることになった。彼女が日本にやってきた当時は、まだまだ外国人児童生徒を受け入れ支援する環境が整っていない時期であり、渡日するなり、彼女はすぐに学齢にあったクラスに入れられ、何のケアもないまま、辛い思いをしていた。彼女は作文で、初めて日本の中学に入った時は、授業の日本語がお経のようで理解ができず、6時間もただわけもわからないまま、教室で座っていることが苦痛だったといっている。また、クラスメートとも、意思疎通がはかれず、体育の時間などでおいて行かれたこともあるという。自分が学校でうまくやっていないことを両親に告げることはできなかった。母親も、中国の学校でトップにいた娘が、日本の学校でついていけないということはわからなかったのだ。結局、彼女が学校の中で辛い思いをしていたということを両親が知ったのは、彼女が高校受験の時である。日本語がほとんどわからないまま、彼女はテストを受けなくてはならなかった。そのため、問題がまったく解けず、受けるなり落ちたことがわかったという。そ

の落ち込みはひどくて、今後の不安もあり、彼女はすぐには家に帰れず、公園で一人で泣いたそうだ。でも、家に帰ると、母親の「テストできた？」という言葉に、「できた」と答えるしかできなかったという。結局、全日制高校は合格できず、定時制にも入学枠がなく、通信制の高校に進学することとなる。そうやって初めて、両親も張さんが学校で大変だったことを知る。

通信制の高校は、張さんにとっては中学以上に大変であった。通信制のシステムは、プリントをもらい、自宅で学習し、自分で教科書の中から答えを見つけて書きこむという作業をしなくてはならないが、日本語があまり理解できない彼女にとってそれは骨の折れる作業であり、それならば、まだ、授業をしてもらい、噛み砕いて講義してもらった方がわかるという。中には、「おふくろの味を書け」などという問題もあり、一人では理解できないことも多かった。しかし、もともと中国で勉強ができる子だった彼女にとって、できないということは苦痛だった。ボランティア日本語教室に宿題を持ってきては、熱心に聞いていた。また、彼女は英語があまりできない。というのも、中国の中学の時とはやり方が違うらしい。そこで、彼女は高校に入ってから、日本の中学の教科書をどこからかもらってきて、熱心に勉強をしていた。そのような勤勉さから、張さんは、次の年に定時制の推薦枠をもらい、定時制に1年遅れて転入することができた。しかし、その後、支援者グループ等の働きかけもあって、後に渡日してきた子供達が、様々な特別措置を認められて、全日制の高校に入学していく。その様子を見て、張さんは「私ももっと遅くに日本にくればよかった」と思ったという。

張さんはその頃からずいぶんと流暢な日本語を話すようになったが、物語などのまとまった文を話すことは苦手であった。ある時、みんなで怖い話などをしていて、その話の合間合間で、張さんが、私もこんなことがあった、あんなことを知っているなどと、合間の手を入れてきた。そこで、彼女に、みんなにわかるよう詳しく教えてと言ったが、彼女は話すことを嫌がった。日本語ではうまく話せないという。中国語でもいいよというと、中国語も忘れたという。うまく話せなくても意味はわかると思うよというと、うまく話せないから話すのが嫌なんだという。うまく話せないことにコンプレックスを感じているのである。このボランティア日本語教室に来る子供達は、ほとんどが中国からの渡日児童であるというのに、お互いが中国語で話すのを見るのが少ない。それどころか、先に日本にやってきて、日本語がうまくなった者ほど、来たばかりの子に対して、日本語で話そうとする。もちろん、来たばかりの子には、なかなか通じないので、中国

語交じりにはなってしまうが、それでも、子供達の中には、日本語で話すことが優位だと感じる何かがあるようだった。

#### 張くんの事例

張くんは小学6年で渡日し、学齢どおり6年に在籍する。張さんの弟にあたる。張くんも、張さん同様、中国では比較的勉強ができた方で、班長も経験している。中国では、班長になるということは学力、運動能力がともにあると認められたということだけでなく、先生の代わりに同級生に対し、指導や指示をすることができ、クラスの中では、絶対的な存在であると見られる。しかし、張くんもまた、日本に来てから、様々な問題にぶつかっている。言葉が通じないうちは、相手にされないことの方が多いが、言葉が通じてくると、かえって対立が生まれるという。

「ありがとう」という言葉は、日本ではよく使われるが、中国ではそれほど使わない。そのような習慣の違いが、互いに誤解を生む原因となっているようである。中国では、喧嘩をするときは、どういった状況であっても先に手を出した者が悪いとされる。そして、売られた喧嘩は買うものだとしてされている。それゆえ、「喧嘩両成敗」という習慣がある日本を、張くんはなかなか納得できない。また、叱られるときも、中国では、叱る人の目を見ることが一種の「叱られポーズ」となっているが、日本では頭を低くうなだれているのが「叱られポーズ」となっている。このようなところから、反省がないと誤解される児童もいる。そして、張くんもその一人である。彼は大病で、話し方がぞんざいなので、何かとクラスで目を引く存在であった。張くんの在籍していた学校は、市の中でも荒れており、そのため、もともと生徒同士のいざこざが絶えない。そこに、張くんのような異文化を背負った子供がやってくると、矛先は当然彼の方にむき、彼は格好のいじめの対象となった。

発端は、彼が同級生に借りた鉛筆を投げて返したことにある。中国では、同級生同士、物の貸し借りをしても、水臭いので、御礼の言葉はあまり使われない。また、投げて返すということも、気安さの現れである。ところが、投げて返された子にしてみれば、馬鹿にされたと感じ、大喧嘩となった。それから、陰険ないじめに遭うこととなる。彼は、学校ですっとストレスを感じており、そのイライラを姉の張さんに向けて発散させることも多く見られた。張さんは泣き出し、そのことで張くんは更に落ち込んでいった。張くんは学校のいろいろなことをよく話してくれていたが、いじめがエスカレートしてい

くことで、話もできないようになっていった。何か聞いても、「言って解決できるんなら苦労ない」というばかりであった。彼は、そのうち、「お金をちょうだい。お金をくれたら中国に帰る」と言い出すようになった。彼はとて中国に帰りたいという。お金の問題さえ解決すれば、家族一緒になくても、自分だけでも中国に帰る道を選ぶというのである。結局、進学などを契機に、張くんの様子も落ち着いてくるが、彼は自分のことを中国人だと見られるのは嫌だと言うようになった。そして、日本人であり、中国人であるような、半分半分の姿は、中途半端だから嫌だ、早く日本人になりたいといった。

#### 呂さんの事例

呂さんは渡日まもない16歳の女子であるが、年齢的に義務教育年齢に入らないということで、受け入れてもらえる学校がなく、仕方なく夜間中学1年に通うしかなかった。彼女の妹は義務教育年次だったため、全日制の中学校に入ることができたが、なぜ自分だけがという思いはあったという。なんとか受験して高校に行きたいと思ったようだが、中国で学んできた外国語はロシア語で、英語は学んだことがないという。このような状況で受験を考えなくてはならない。越えがたい壁の前で、彼女は髪を染めてきたこともある。これが彼女なりの社会への反抗なのであろう。現実には学力的に向上していかない児童は多い。

#### 江さんの事例

江さんは当時、小学6年であり、母親が日本人と再婚したことがきっかけで渡日している。在籍は学齢通り6年である。複雑な環境のもとで姓も変わり、日本の姓でありながら、中国の名を持つことになった。

このような状況の中で、彼女は一生懸命日本語を勉強しなければという気持ちにかられたという。それが、両親の願いだったからである。何より、新しい父親と会話することができないのでは、自分が原因で両親がうまくいかなくなってしまうと心配したのである。これから日本人として生きていくという決意でもあったという。そして、彼女もまた「中国帰国者」の子供だったので、中国、日本両方の血が入っているのだから、日本人として認められ、日本人として生きていくことが可能だと思っていたらしい。しかし、最近ようやく、日本人になろうと思ったけれど、無理だということに気づいたという。名前のもももちろんだが、それよりも、学校のみんが中国人の子として見ると

いう。また、自分自身もどうしても中国語の影響を受けて、日本語に訛りが抜けないう。しかし、問題は言葉ではないと彼女は言っていた。言葉が上手になればなるほど、自分は中国人なんだという意識が強くなっていったらしい。言葉が話せない時は、言葉を覚えるのに必死で、受け入れられたいという思いばかりが先行していたが、言葉がわかり始めると、違いばかりが浮き立って見えてくるようになったという。そして、どうしても日本人になりきれない自分を感じて、ようやく自分は中国人であるということを受け入れられるようになったという。以前は日本語のことを指摘されないよう、得意なため語（友だち同士のくだけた話し方）ばかりを使って話していたが、最近では自ら、知り合ったばかりの人に、自分は中国人であるというようになった。そして、昔は日本語がぜんぜん喋れなかったんだとまでいうようになった。

#### 蔡さんの事例

蔡さんは、当時中学1年であり、日本では年齢どおり中学1年に転入する。そして、日本に来てから一度も中国に帰っていない。中国に帰りたいのはやまやまだが、日本にやってくる時、家財道具一式売り払って来たので、中国には帰るところがないという。日本の生活はストレスがたまり、楽しくないという。そして、日本の学校では、落ちこぼれただけで、中国でももうブランクがあいているから、きっと勉強がついていけないだろうという。また、中国に祖父が残っているのだから、何とかお祖父さんを連れて来るか、自分たちが中国に行くかすることになると思う。お祖父さんは、資格の関係で、なかなか日本に連れて来られない。誰か他の「中国帰国者」の家で、養子縁組をして連れてきてもらう以外に日本に来るのは難しいという（情報の真偽は不明）。しかし、お金がないから、祖父が渡日できない場合、彼女達自身が中国に帰ることもやはり難しいという。

蔡さんは、進学を希望しており、本来ならば、主要科目を勉強すべきなのだが、それを蔡さんは重々感じておりながらも、受験とは関係のない、笛の練習ばかりしてしまう。彼女は、ペーパーは点数が自分にしかわからないが、音楽は、みんなに自分がうまく吹けるかどうかがあるので、うまくできないと恥ずかしいという。自分自身もそのような葛藤を超えられない状況の中で、蔡さんの家は、日本でも、中国で生活してきたような生活をしている。彼女の家は農家なのだが、教師が家庭訪問にいても、いつも布団がひきっぱなしになっている。また、両親も、農家の娘が進学などするものではないと考えており、中学を卒業したら、働かせたいと考えているようである。両親も日本の生

活が理解できず、彼女自身もどうしたら説得できるのかもわからず、当時の彼女は、あとどれぐらい日本に居続けるのか、いつごろ中国に戻るのかもわからず、ただ、目先のことをこなしていくしかない状況であったと、筆者には感じられた。

#### 陸さんの事例

中学1年で渡日することとなり、学齢通り中学1年に転入した陸さんの在籍する学校では、通訳者が彼女に付くこととなった。しかし、陸さんが日本語でもわかる簡単なことを中国語でやり取りしていると担任の先生に怒られたという。これは、教師が、通訳者と陸さんのやりとりに入り込まず、言葉の通じない不安を感じたためであろう。しかし、陸さんにしてみれば、ようやく現れた中国語の通じる相手なのである。どうしても、日本語しか通じない先生より、通訳者の方に親しみを覚えてしまうのは仕方のないことだろう。

彼女は、まったく日本語が話せなかったが、日本名で入学した。中国名で入学したらいじめられると思っていたからである。しかし、日本名にしたところで、中国語しか話せないのだから、周りの生徒からは、日本人なのか中国人なのかという質問を突きつけられる。陸さんは度重なるストレスのため、しばらく登校を拒否し、また、体調を崩して半年ほど入院してしまう。半年休むと、日本語もまたおぼつかなくなり、そして、学力も落ち込んでしまった。受験も間近に迫り、学校に行かなくてはならないと思うのだが、どうしても行く気にはなれないと言っていた。

#### 4. 考察

3の事例とアンケートの結果より、いくつかの項目について、更に掘り下げて考察していく。

##### 4.1 言語

思考語として華語<sup>3</sup>を使用する者は渡日3年以内の者に多いが、渡日10年以上の者は

<sup>3</sup> 抽象的なことを考えたり、組み立てたりするときに使用する言語

<sup>4</sup> ここでは華語をどの地域に住む中国人に対しても、共通に通じるという意味での、広義の「普通話」として定義する。

ほぼ全員が日本語に変わっている。幼少期に渡日した者で、思考語が日本語であると回答した者の割合は格段に多い。しかし、渡日3年以内の者、または比較的高学年で渡日してきた者は、張さんのように、簡単な会話は日本語でできて、物語の説明など、組み立てながら話さなくてはならないものについては、うまく話せないから話したくないというコンプレックスを抱いている様子が見られる。

思考語として定着を見せつつある日本語であるが、学校の授業ということになると、まったく理解ができないという者も少なくない。筆者が見てきた子供たちの中には、日本語を理解するのに、文の横に中国語の訳を書く者もいた。新しい知識、新しい単語がどんどん増えていく学校の教育システムで、それについていくことは日本人であっても並大抵のことではない。陳さんの例のように、知っている漢字語彙であっても音声理解が追いついていかない、という問題点がある。アンケートからは、日本の社会では日本語を使用するが、親族らとのコミュニケーションにおいては華語を使用するといった結果が出ている。しかし、幼くして渡日した児童は、中国の学校に通っていた時に学んだ華語は忘れてしまい、方言しか使えないという者もいた。

#### 4.2 交流

アンケートからは、「中国帰国者」児童生徒は中国生まれなのに、本国の中国人に対しては、「ぺらぺら流暢な中国語で話しかけてくるので対応に困る時が多い」と答える者が3分の1にもなり、言葉の上で“中国”に適応しにくくなっている様子が見られる。実際、低学年には、渡日後1年もたたないうちに、「あれなんて言うの?」と、思っていることが中国語でも日本語でも出ない子供がいた。しかし、「考え方がずいぶん異なるので付き合いづらい」、「本国の中国人を目前にして、自分は中国人とほど遠いと感じる」と答えた者はなく、「ほどよく付き合える」、「自分もやはり同じ中国人だなと感じる」と言葉以外の面で本国の中国人とうまくやっているとと思っている様子が見られる。しかし、一方で、日本に馴染んでくると、同じ境遇の友達からは離れていく様子も見られる。交流機関で催しがあっても、「中国帰国者」児童生徒同士集まって遊ぶのではなく、それぞれが日本人の友達を連れてきて遊ぶ様子が見られた。そして、そのうち、交流会にもやってこなくなる。一人立ちしたと考えることもできるが、いずれにせよ、「中国帰国者」児童生徒同士の交流はあまり行われていないようである。

#### 4.3 帰属意識

アンケートでは、「自分のことは何人と思うか」という問いに対して、「中国人でもあり、日本人でもある」という答えが最も多く、自分の今の立場に対して、「二つの国に挟まれてはつきりしない。あまりうれしくない」という意見が目立ったが、どちらの国も捨て切れない様子が窺える。そして、江さんの事例からもそういった様子が窺える。アンケートの上では、中華民族に対しては、「世界に冠たる文化を誇る優秀な民族である」と中国人としての誇りを持っていると感じさせる者が大多数であり、中国という国家に対しては比較的好印象を持っている。しかし、気持ちの上では複雑で、「今度生まれ変わったら何人になりたいか」という問いに対しては「日本人」、「中国人」、「生まれついた国の人」、「アメリカ人」と意見はさまざまであった。

また、特に渡日して間もない者の方が、様々な状況から、そのエスニシティ(特定集団への帰属意識)の有り方は揺れ動いているように思える。中国にいた期間が長いので、自分は中国人であるという意識はあるが、しかし一面では日本人になりたいという声も聞かれる。これは、中国に帰属観を持ち、中国的な行動様式や価値観を持ったまま日本社会で生きていくことを困難と感じさせる何かがあるということを示しているのではないかと。

一方で、陳さんの例のように、中国人のエスニシティを有したまま日本の社会に溶け込んでいくケースも見られる。江さんのように、早く日本人になりたいと思う時期を越えようと、再び中国人として生きていこうとする例も見られる。

これらの事例から総合的に考えると、意識の上ではやや中国寄りの帰属感が強いといえるだろう。しかし、気持ちの上では、日本に近づきたいという思いも見られ、彼らの複雑な心境が読み取れる。

#### 5. 多文化共生と「中国帰国者」児童生徒

これまで、様々な面からの子供達を見ていった。そこから、「中国帰国者」児童生徒は、異文化の中で、摩擦を受けながらも、中国人の感覚を持ちつつ、完全に日本人化することが難しいため、適応の難しさが感じられた。また、こういった状況が日本の教師や児童生徒たちには理解されないために、誤解が生まれ、学習不適応とされたり、それがいじめにつながる例も見られた。

こうした子供達に対する学校の取り組みを見ていくと、「中国帰国者」児童生徒の自信

につながるような活動を組んだり、周りの生徒への理解を呼びかけるなど、かなりの時間を費やして、「違い教育」や補習などに取り組む学校もあることが注目される。陳さんの学校などはその一例である。しかし、多くの学校では、まだまだ、そこまで追いついていないのが現状であろう。陳さんも、渡日したことで、さまざまな苦勞を乗り越えなくてはならなかったが、彼女の場合は、張くんや陸さんのように、教師や生徒から誤解やいじめを受けている様子は見られなかった。そして、多文化共生に取り組む彼女の学校では、学習面で本人が遅れをとっていても、クラスメートと彼女との関係はよく、学校にちゃんと居場所があり、中国の習慣を理解した上で、周りが行動している様子が見られた。

当然、こうした取り組みがなされていない多くの学校では、「中国帰国者」児童生徒は周りから理解されにくいだろう。張くんの「叱られポーズ」や「鉛筆を投げ渡し」など、習慣の違いが誤解を生み、教師でさえ誤解して、子供たちがいたたまれない気持ちとなっていた例がそれである。

また、陸さんの事例で述べたように、彼女は、初めから日本人だったらいじめられないと思っていた。そして、彼女にとっては、日本人で“いる”ことの証の第一歩が改名であった。名前のこと、言葉のこと、これらが違うことがいじめられる原因となっていると思っているからだ。そして、その傾向は、張くんにもあって、日本人になりきれていないと自分はいじめられるので、中国人であった過去を掘りかえしてほしくないという思いがあり、日本人らしく振舞う様子が見られる。

また、後から渡日してきた者に対し、「僕は日本人だが、君は中国人だ」ということをいった児童もいた。こうした例は他の児童生徒にもよく見られる。やはり、多文化共生の取り組みがなされていない学校の子供達であった。

筆者は、中国人として生きていこうとする児童と、日本人として生きていこうとする児童という違いが生じるのは、学校の取り組みによる影響が大きいのではないかと考える。そして、多文化共生を実現させるためには、日頃から、彼らが中国人としてのびのびふるまえるよう、学校での居場所作りが必要だと考えている。つまり、言いかえれば、中国人として生きていくことができる環境を作っていくことが必要だと考える。

しかし、彼らの肉親は、一概にそうすることがいいことだとは思っていないようだ。というのも、肉親、特に「中国帰国者」本人は、気持ちの上で、日本人なのである。日本人の自分から生まれた子供、そして孫は、日本人であると思いたい者は多い。戦争に

よって、一時、中国に留まることになったが、「中国帰国者」本人にとっては、日本こそが本来帰るべき土地であり、中国にとどまっていたことは不本意であり、間違いなのである。そのため、日本に帰国してから、必要以上に日本らしさを追い求める者は多い。日本の歌を歌い、景色を懐かしみ、ようやく長年の夢だった日本への帰国を実感するのである。そのなかで、子供や孫の国籍を変更し、日本人らしい名前を付け直す「中国帰国者」は多い。子供達は、こうした肉親と、多文化共生を目指す学校の取り組みとの狭間で、自分は日本人でいいのか、中国人でいいのか、苦悩しているのである。

## 6. おわりに

これらの調査を通じて、児童のエスニシティを知ることができた。大まかな傾向として、「中国帰国者」児童生徒はかなりの部分で、中国のエスニシティを有していた。中には、懸命に中国人であるということを否定している様子が窺える児童もいた。ところが、彼らでさえ、中国のエスニシティを有しており、気持ちの中では複雑な思いを抱いている様子が窺えた。これまで述べてきたように、エスニシティを否定してしまう環境は児童にとって、大変負荷がかかり、のびのびと育つという方向とは逆行する。そして、教育上也望ましい結果はもたらさないであろう。しかし、肉親の立場からすれば、児童を日本人であることにしておきたいという気持ちは大きい。辛い体験から生まれた「日本人は日本で日本人らしく育つことが幸せだ」という考えもあるのだろう。また、「中国帰国者」本人が、日本人としてなかなか認定してもらえず、帰国が遅れたという背景があるため、子供や孫の国籍は、何が何でも日本国籍にしておかなければならないという思いもあるであろう。そして、日本で成功していくこと、一生暮らしていくことを考えると、現在の社会環境では、外国人という立場はまだ不利であるというも事実である。

今後の課題としては、「中国帰国者」自身も「新華僑」の一員とされているが、彼らを中国人集団に含めてもいいのだろうか、国籍の面、移住の面からとらえなおす必要があると思える。また、家族で渡日してきたグループではあるが、純粋な日本人は本人ただ一人である。家族のほとんどの者が中国のエスニシティを有している現状で、何故に日本籍、日本らしさなどの「日本」というものがクローズアップされるのか。家族の背景、国家間の経済格差などを調べてみる必要がある。これらのことを今後の課題として、更なる研究を続けていきたい。

## 7. 主要参考文献

読売新聞大阪社会部編[1982]『残留孤児』  
大田季子・谷合佳代子・養父知美共著[1994]『戸籍と子どもの人権』明石書店  
奥田安弘[1996]『家族と国籍』有斐閣選書  
入国管理協会編[1998]『外国人のための入国・在留・登録手続きの手引き』日本珈琲出版  
小川津根子[1995]『祖国よ「中国残留婦人」の半世紀』岩波新書  
厚生省[1985]『引揚げと援護三十年の歩み』  
厚生省[1994]『中国帰国孤児生活実態調査結果の概要』  
五十嵐美恵[1996]『哀しみの大地』日本経済新聞社

注 1) 「中国帰国者」は一般に、厚生省により2つのタイプに分類される。1つは「残留孤児」と呼ばれるものであり、ソ連参戦前後に日本人の両親と生死別した者で、当時12歳以下の者がこれに該当する。そして、もう1つは「残留邦人」とよばれるものである。これは、いわゆる「残留婦人」と呼ばれる者とほぼ同様であり、状況判断の能力があるのに帰国しなかった者が該当する。その意味において、13歳以上でも自分の置かれていた状況がわからなければ「孤児」扱いであり、12歳以下でも身元がわかっている者や日本人父母と一緒に残った者は「残留邦人」扱いになる。そして、「残留孤児」の扱いに該当するか、「残留邦人」の扱いに該当するかで、日本帰国に際して大きな区別があった。「孤児」扱いの場合、まだ比較的早い段階に日本への帰国を実現することができたが、「邦人」扱いの場合は、厚生省が「自分の意志で帰国しないことを選んだ者」と見做し、帰国が大幅に遅れた。そのため、現在になつてようやく渡日を果たしている者には、「残留婦人」、つまり子供達にとっての「祖母」が多い。なお、本文では、「中国帰国者」とその家族（つまりその中には「中国帰国者」児童生徒が含まれる）をあわせ「中国帰国者」グループとする。

注 2) 「中国帰国者」となる者の多くは、農業移民関係者であった。外務省の調査によると、彼らは開拓団員、義勇軍、大陸の花嫁という形で満州にやってくることになる。政府は満州国建設のため、長野県、広島県などの比較的貧しい地域の農民に対し満州をユートピアに仕立て入植を勧めた。村は口減らしのため、男性の多くは開拓団として、そして彼らの満州定住を促進すべく、女性の多くは、開拓団の花嫁となるために満州に渡る。しかし、実際の生活は、聞いていた程は豊かなものではなく、「政府にだまされて連れてこられた」と語る者が多い。

注 3) 対象は小学校から高校にかけての30人であり、回答率は約80%である。

年齢・渡日年・帰国者本人との続柄・日本人との結婚についての考え方・使用言語・その役割・交流の相手・出身国のイメージ・行き来・自分は何人か・生まれ変わったら何人になりたいか・帰化・スポーツ試合時の応援・日中の風習・食事等々、アンケート項目の主なもの以上は以上の通りである。